

國學院大學学術情報リポジトリ

シオニスト フェーリクス・ザルテン：
パレスチナ紀行『古い大地に新しい人間』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 村山, 雅人, Murayama, Masato メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000009

シオニストフェーリクス・ザルテン

— パレスチナ紀行『古い大地に新しい人間』 —

村山雅人

フェーリクス・ザルテン（本名ジークムント・ザルツマン、一八六九（一九四五）は小説家、戯曲作家、翻訳家、文芸批評家、演劇批評家、オペレッタのリブレット作家、映画の台本作家、編集者、ジャーナリスト、と創作のあらゆるジャンルで旺盛に活動し、コラムだけ取っても七〇〇編を残した多作家であり、さらにその原稿にはほとんど加筆修正が認められなかったといわれる巧みな文章家であった。彼の活動は創作分野だけにと止まらず、映画制作者、劇場所有者、オーストリア・ペンクラブ会長、オーストリア・ユダヤ人作家協会会長とさまざまな肩書きを持ち、まさに八面六臂の活躍をし、世紀末ウィーン

の文化生活に大いに貢献した才人であった。

ところが、今ではザルテンは一九世紀末ウィーンの代表的な作家集団「若いウィーン」、特にシュニツラーやホーフマンスタールとの関連でしか、ほぼ彼の名前は登場しなくなった。その理由の一つに、ザルテンは第二次大戦直後に亡命先のスイスで死亡し、その間の消息が詳らかではなく、かつまた、ユダヤ人である彼の作品は焼失したり、散逸してしまい、研究は考古学研究にも似た発掘作業から始めなければならない事情があった。この状況を打破したのが二〇〇二年に出たユルゲン・エーネーの博士論文『フェーリクス・ザルテンの物語作品』

である。

ザルテンは一八八九年に文芸誌や芸術年鑑に詩や批評を寄稿し、エドアルト・ミヒヤエル・カフカが一八九〇年、若い作家たちと呼びかけてオーストリアにおける新しい文学創造のために文芸誌『現代文学』を創刊したとき、ザルテンもそこに参加した。しかしそれ以前の彼の個人情報に関して、作家自身も多くを語っておらず不明な点が多い。この時、カフカの主唱で参集した二〇名を越える若い作家たちがカフエ「グリーンシュダイドウル」を集合場所としたことから、彼らは当時「グリーンシュダイドウル・グループ」と呼ばれた。後にこのグループは文学史上に「若いウィーン」として名を止めることになる。また「グリーンシュダイドウル」も当時ウィーン随一の文学カフェとしての名声を今日に至るまで残している。

「若いウィーン」の中で、特にアルトゥール・シュニッツラー、フリーゴ・フォン・ホーフマンスタール、リヒャルト・ベアー、ホフマンそしてフェーリクス・ザルテンの四人は作家としての評価が飛び抜けていて、彼らは自然と親密な関係になり、グループ内で特に彼ら四人を指して「クリク（一派）」という言葉が使われた。

ザルテンは現在、先に示したことが一因となって、シュニツ

ラーやホーフマンスタールに隠れて、すっかり影が薄くなつてしまっているが、一九二三年に一つの作品を発表するとすぐに様々な言語に翻訳されて、彼の名前はオーストリアの国境を越えて有名になり、ウィーンの文学界で最も著名な作家に上り詰めた。それがイタリア語で子供を意味する「バンビーノ」に由来する動物物語『バンビ』である。さらに一九四二年、ウォルト・ディズニーがこの作品をアニメーション映画化すると、映画は一躍世界を席巻し、原作者も世界の作家となった。だがフェーリクス・ザルテンは、まさしく現時点では、二〇〇六年刊行の論文集に冠された標題がうまく言い当てた「無名の著名人」と言ったところだろう。

フェーリクス・ザルテンは、父親が事業に失敗する、ギムナジウムの低学年までウィーンの市民階級に属する典型的な同化ユダヤ人の家庭で育った。彼は父親を例に取り、リベラリズムの時代の同化ユダヤ人家庭の雰囲気をこう伝えている。「父の考えや見解はあらゆる点においてリベラルな時代のものであった。……彼は心から人間間の宥和、つまり民族間の敵意が無くなり、ユダヤ人が諸国民の共同体に融合する、と信じていた。父は宗教の違いを時代遅れでナンセンスだと笑い飛ばした。そして彼は、ラビの息子として授けられたユダヤの精神的教育や

ユダヤ教信仰を軽率な性格に駆られ捨て去った。父もまた、彼が支持したりベラルな時代の考え方に沿って心情の上ではコスモポリタンであったので、宗教の規定や伝統から自由な、いわば漠然とした汎神論に傾倒していた。よって、彼はわれわれ子供たちが宗教の授業を受けるか否かについてほとんど関心がなかった⁽²⁾。この環境で育ったザルテン自身「子供の時は、ユダヤ人ではなかった」⁽¹⁰⁰⁾と言うように、自らの出自についてまったく無自覚であった。それを物語る例として、当時小学校ではユダヤ教の授業がなかったせいもあるが、カトリックの授業に出、大変行儀良く熱心な生徒だったので、教師の神父からほめられて褒美をもらったというエピソードがある。この述懐は、一八七〇年代はまだユダヤ人が同化に希望を持つことが許されたりベラルな政治的雰囲気支配的であったことの証左でもある。ザルテンが自らの出自をいやが上にも意識せざるを得なくなったのは、八〇年代初めから充満しつつあった反ユダヤ人の雰囲気⁽³⁾にギムナジウムで接した時が最初であった。この時の体験を、後にザルテンは彼の成長過程における「屈曲」と捉えた。これ以降、彼のユダヤ人としての自覚は時間の経過とともに強まっていった。「ユダヤ人意識はわたしが成長するにつれて強くなり、わたし自身が成熟してゆくのに合わせて、その

意識もわたしの内面で成熟していった」⁽¹⁰³⁾ザルテンの心情変化に追い打ちをかけたのがテオドール・ヘルツル（一八六〇—一九〇四）の登場だった。「そうした時にテオドール・ヘルツルが現れた。わたしは彼によって自分が正しいとわかり、彼の風貌や人間性、彼との交流がわたしを夢中にさせた。彼の犠牲をいとわない、勇気ある信条表明が、わたしや偽りのない感受性を持った人たちに、彼に味方してイスラエルを認めるのが義務だ、と命じた」⁽¹⁰³⁾ザルテンはシュニツラーやホーフマンスタールと違って、ヘルツルが創刊したシオニズム機関誌『世界』へ一八九九年から二年間、第一六号から第二六号までコラムを定期的に寄稿し、シオニズムと積極的に関わった。当時、大方の同化ユダヤ人から拒絶された状況下で、シオニズムに明確な支持表明をすることはかなりのリスクを負った。そうした時代状況を、ヘルツルの協力者だったイシドル・シャリツトは簡潔にこう記している。「この問題は彼ら同化ユダヤ人にはあまりにばかばかしく、また彼らの将来の経歴をきわめて危うくするものに見えた。ヘルツルが獲得できたのはひとりの若い作家しかなかった。それがフェーリクス・ザルテンだった」⁽⁴⁾ザルテンはヘルツルの死後も、プラハ、プレスブルク、クラカウ、レンベルク、チエルノヴツでの講演活動を通じてシ

オニズム運動との接点を絶たなかった。このように、シオニズムやユードेंटトゥームに対してザルテンが示した興味や実際の関与は誰の目にも明らかであり、ある時「若いウィーン」のリーダー的存在であったヘルマン・パールは、ヘルツルの死後シオニズム運動の牽引車としての役割をザルテンが果たすべきだ、と勧めたと言われている。⁶⁾

ザルテンのシオニズムに対する姿勢や見解は、パレスチナ旅行記『古い大地に新しい人間』に余すところなく表出される。彼は一九二四年パレスチナ旅行を企て、かなり長期間にわたり歴史的な都市や当時すでに百ほどあった入植地を訪ねる。当時、もちろん人口分布の点で、アラブ人は五〇万人と圧倒的多数派を形成していたが、ある特別な都市を除いて、三つの宗教の信徒が混在して住んでいた。とりわけこの時代、パレスチナではユダヤ人による新たな開墾や入植地の整備拡大が急速に進んでいた。つまり、一九一七年イギリスがユダヤ人のナショナルホーム建設支持を正式表明した「バルフォア宣言」以降、自らの国を建設するという理想に燃えた若者を主体とした移住者が急増し、ユダヤ人の人口を六〇パーセントも押し上げた。いわゆる第三次アリアーと呼ばれた時期で一九二三年まで続いた。このシオニズム運動がひとつのピークを迎えた時期に、ザルテンは

様々な形態や進捗状況を呈していた入植地をつぶさに見て回り、その際若干のアラブ人村も訪ね、その時に得たユダヤ人国家建設についての未来展望を示す。「ほんの一部で、すべてとは言えないが、わたしはこの国を見て回った。現在そして未来に向けて完全に目覚めたひとつの国であった。わたしは、ここで自らの生活を築こうとする若者たちを見て、母親の胎内にいる子供の心拍と同じに、まだ生まれざる新しい時代の脈動を聞いた」(98)と。

この表明にすでにシオニズム運動が実現可能なプロジェクトであることを、この紀行を通して知らしめようとする著者の意図が明らかになる。『古い大地に新しい人間』は、ヘルツルの『ユダヤ人国家』(一八九六)や空想未来小説『古い新しい国』(一九〇二)と同種のシオニズムのプロパガンダ文書に属すると断定できる。

ザルテンはもちろん、ユダヤ人の離散以降パレスチナに二千年間住み着いているアラブ人と一八八〇年代に入ってからいわゆる帰還してきたユダヤ人との間で様々な対立や紛争が起こっていて、不穏な情勢はさらに拡大する可能性を否定できないことは承知している。たとえば、ダビデ王が推戴され、エルサレムに移されるまで都であったヘブロンや旧約聖書でシケムと呼

ばれた町ナブルスといったユダヤ教にとっての歴史的都市は、完全にアラブ人の支配下にあり、当時ユダヤ人が足を踏み入れるのは危険であつたと紹介されるが、こうしたところは例外であり、ザルテンは両民族が将来に向けて一国内で共生してゆくことが可能であると考える。その見解を証明するために、入植地であると共に小さな町を形作っていたユダヤ人ゲマインデ、ベタハ・ティクヴァで起こつた悲劇を、まさに雨降つて地固まるが如き例証として挙げる。

ベタハ・ティクヴァは一八八〇年代の初めに開拓が始まり、今ではさまざまな果実がたわなに実り、平穩に開拓の歴史を刻んできた大変豊かな入植地の印象を与える。しかし、このゲマインデは数年前五〇〇〇人のアラブ人に襲われた歴史を持つていた。周囲に十分な防衛施設が整えられていたので、この町は少数の防衛団だけで、援軍が来るまでの数時間、自力で襲撃を持ちこたえることができた。しかし戦いが終わって、ひとりの青年が無惨な死体で見つかった。両足は切断され、その両足は靴を履いたまま切り裂かれた腹部に詰め込まれていたのである。襲撃の首謀者は拘束されて裁判にかけられ、二〇年の禁固刑が言い渡された。こうして事件は落着いた。ところが、この事件の本当の展開はここから始まった。ユダヤ人ゲマインデ、

ベタハ・ティクヴァはそれから一年も経ずして、イギリスの委任統治政府に恩赦を嘆願した。高等弁務官は即座にそれを承認し、アラブ人受刑者は釈放された。さらに驚くことに、ユダヤ人指導者は今後の両民族の融和を固めるために、この男の出所を祝う会食を催した。元受刑者は、アラブ人の政治家に付き添われてそれに出席し、そして自ら進んで、今後決してユダヤ人とユダヤ人の活動に危害を加えない、と誓った。以上が、この惨い事件の顛末である。⁽²⁵⁾

ザルテンは、この惨事を最終的に収拾するために取つたユダヤ人の行動をきわめて適切かつ理性的な解決方法であつたと評価する。「この平和と宥和の政治行動は、ユダヤ人がなし得る唯一正しい政治的態度である。それはユダヤ人の心性とユダヤ人の精神に叶うだけでなく、真の人間的な要請を満たすものでもある」⁽²⁵⁴⁾ さらに彼は、二民族一国家であるパレスチナにおけるユダヤ人の守るべき姿勢をこう明言する。「ここ太古の故郷の地において、ユダヤ人は征服欲の強いヨーロッパ人の態度を取つてはならず、また暴力に対して暴力で応じようとしてはならない。そしてそのための十分な力を持っているなら、なおのことそのような行動を取つてはならない」⁽²⁵⁴⁾ と。

アラブ人との宥和と共生努力を、ザルテンはまたひとりの人

物を通して例示する。名前をヨーゼフ・トランペルドーアと言
い、元々ロシアの軍人で、ユダヤ人の出自にもかかわらず将校
に昇進し、日露戦争で片腕を失いながらも武勲をたてて勲章で
表彰された後、第一次大戦時にイギリス軍の将校としてパレス
チナに従軍し、大尉で軍歴を終えた。彼は戦後もシリア国境の
開拓地テル・カイに入植者として居残り、歴史を遡れば兄弟民
族であるユダヤ人とアラブ人の相互理解を深めるために尽力し
た。しかしその甲斐むなしく、圧倒的多数を誇るアラブ人との
壮絶な戦闘で倒れ、入植ユダヤ人たちに英雄として名を残す。
かくして、この英雄の名前に因んだ入植地テル・ヨーゼフが誕
生した。そこでは、第三アリアーの若い移住者たちによってキ
ブツ方式の集団農場が合理的に運営されていた。

トランペルドーアの活動は、ひとりのアラブ人によってドラ
マ作品としても描かれた。作者はアシス・ドーマト。彼は十字
軍の時代にキリスト教を受け入れた非常に古いシリア人家系の
アラブ人キリスト教徒で、ザルテンは彼と一度ウイーンで面識
があった。彼はこのドーマトの作品の意義をアラブ人とユダヤ
人、そして当時のヨーロッパにおけるユダヤ人とキリスト教徒
との二重の関係を絡めてこう解釈する。「ひとつの偉大な思想
が重大な現象を生み出すように、個人の作用が未来に影響を及

ぼし、そして、アシス・ドーマトのような今日なおきわめて希
有な事例を通して、今は人類の夢でしかないが、それは後に実
現し得るということを示している。たとえば、アラブ人とユダ
ヤ人の兄弟化とユダヤ人とキリスト教徒の相互理解が少なくと
もまずは、このパレスチナの地で」(85)と。

さらにザルテンは、アラブ人ときわめて融和的に共生を実践
している入植地としてロシユ・ピナを例として挙げる。一八八
〇年代初めにベッサラビアで猛威をふるったボグロムから逃れ
てきたルーマニア人によって開墾されたロシユ・ピナは個人経
営農場である。当初ここでは、桑の木を栽培し、フランスのロ
スチャイルド家の援助で絹の製糸工場を創業するが、運営に失
敗して倒産の憂き目に遭う。その後たばこ栽培に移行した。し
かし、これもオスマントルコのたばこ独占圧力によって栽培停
止に追い込まれ、これまで様々な苦難に遭遇してきた。さらに、
耕作可能な農地は全面積の三分の一しかなく、決して条件に恵
まれた入植地ではない。にもかかわらず、ロシユ・ピナが例と
して示されるのは、その特異な形態、すなわちこの村は、アラ
ブ人の村と隣接していて、ずっと共生に努めてきたことによ
る。それも、アラブ人に仕事を分け与えることによって。それ
ばかりか、この入植地は隣村に学校を建て、アラブ人の子供た

ちはそこでヘブライ語を学んでいた。ロシユ・ピナは雇用だけでなく子供の教育を通じて両民族の相互理解を深め、それをより確かなものにする努力を継続してきたのである。この点に、ザルテンは将来の民族共存のための不可欠な努力目標のひとつを看取した。⁸⁾

ザルテンはパレスチナの将来の可能性を二民族国家と理解する。そうすると、ユダヤ人はパレスチナでアラブ人と永遠に一緒に生活してゆかなければならないのが現実であり、そのためにユダヤ人がなすべきことは、これから恒常的に続いてゆくアラブ人との共存のためにこの大地と彼らの心に種を植える努力である、と彼はみなす。しかも他を顧みないオスマントルコの長期支配のせいで、アラブ人にはその能力があるにもかかわらず、パレスチナはあらゆる面で開発が遅れていた。この遅れを取り戻すための必要な具体的施策は、アラブ人に対する啓蒙・教育活動であり、これが功を奏したならば、今ユダヤ人が始めている難事業を共同で発展させることが可能となる。まさにこれを実践していたのが、ロシユ・ピナであった。こうした努力が、ひいては国境を接している諸大国のアラブ人とも良好な関係の保持にも有効に働く、とザルテンは確信する。

二民族によるパレスチナ国家という思想——決して平等な関

係の上に成立しているとは認めたいが——は、ユダヤ人国家建設を主張した最初の人物であるヘルツルにしても同じである。一八九八年、ヘルツルはフランスの大ラビ、ザドク・カーンを介して、この時トルコ帝国議会議員で、後にエルサレム市長になるユスフ・ズイア・アルカルディから、歴史的に見れば、ユダヤ人のパレスチナに対する権利を否定できる者は誰ひとりいないと認めながらも、ユダヤ人が不在の二千年間パレスチナにはアラブ人が住み着いてきたという厳然たる事実が存在している限り、ユダヤ人は他所に移住地を求めるべきである、との抗議の手紙を受け取る。それに対してヘルツルはこう回答している。「ユダヤ人以外の人間をパレスチナから追い出そうなどと、一体誰が考えるでしょう。わたしたちはユダヤ人をそこに連れて行くことによって、そこに住んでいる人たちを繁栄させ、彼らの富を増大させるつもりでおります」⁹⁾と。さらに、ある時点からヘルツルの政治的シオニズムと袂を分かった哲学者マルティン・ブーバーもパレスチナの展開を二民族国家として展望していた。¹⁰⁾

両民族が共生していかなければならない理由として、ザルテンが強調するのは両民族の人種的同族性である。彼は、両民族が分断状態にあった非常に長い歴史を越えて兄弟の契りを回復

することによってヨーロッパの干渉を排除して、「パレスチナおよび自由なアラビアの存続基盤を磐石」(47)にすることができると訴える。さらにこの民族的同族性は、言語の近似性、そして宗教における同根性にも因由が求められる。歴史的に見ればパレスチナはすべてがユダヤ教の基盤の上に構築されており、したがって、キリスト教あるいはイスラム教の基盤とされているものであれ、それらは元をたせばユダヤ教の伝説に支えられており、混在した生活の歴史を持つ¹¹⁾と。こうした宗教における共通性を示す例として、モーゼに対するアラブ人、つまりイスラム教徒の評価が示される。ユダヤ人が神とほぼ同列視するモーゼは、アラブ人にとっても聖人であった。「イスラム教徒はモーゼを彼らの預言者の前身として崇め、毎年エルサレムから、彼らの伝承によると、モーゼが永眠しているとされる墓所に巡礼する。さらに彼らは、ユダヤ人の父祖が埋葬されたヘブロン¹²⁾のマクベラの洞窟の上にモスクを建て、それを彼らの最も大事な聖物の一つとみなしている」(132)

ザルテンの紀行の中で物語られている平穏な両民族の共存生活や、血なまぐさい紛争後のあまりに牧歌的な民族宥和の情景は、ユダヤ人によるパレスチナ再建のことさら正当化する意図を感じさせずにおかない。アルカルデイが指摘しているように、

ユダヤ人が主張するパレスチナに対する権利は、今や歴史的な事実でしかなく、現実的な実体ではない。それにもかかわらず、この歴史的な事実は感傷や憧憬、願望とまぜこぜにして、あたかも実体を持った要求として提示される。パレスチナは、ディアスポラにあってもこの地と密接に結びついていたユダヤ人の思い、憧れ、思想、希望、創造意欲を集約する場所であり、まさに太陽の光線を集光するレンズに等しい。故に、この地を救うことができるのはユダヤ人のみであり、また、ユダヤ民族を救うことができるのもこのパレスチナ以外にはない¹²⁾と。さらに、約束の地を人によって回復することを宗教的に正当化することは困難であったにもかかわらず、パレスチナの再建が、ディアスポラと同様に「神意」であると主張するに至っては、それは政治的シオニズムの喧伝と評価せざるを得ない¹³⁾。ザルテンが主張する「神意」を行動によって証明する役割を課せられているのが、紀行の中で「新しい人間」として性格付けられる第三アリヤーの若者たちである。そして彼らは、後述するが、新しい宗教の担い手としての特徴も付与される。彼が挙げたユダヤ人によるパレスチナ再建の根拠の中で、納得しうるのはせいぜい次の件であろう。「自分の手で開墾するためにここにやって来たユダヤ人に、この小さな土地は与えられるべきだろう。

なぜなら、この広い地球上の他のどこでも、彼らには故郷が拒まれていたからである」(47)

ザルテンはパレスチナ再建の牽引車である第三アリヤーの若者たちの性格を際立たせるために、旧移住者との意識の違いを強調する。つまり、旧移住者たちは一八八〇年代初頭にベッサラビアで猛威をふるったボグロムによって殺される恐怖から逃れて、個人個人が新天地で自立した生活を夢見て移住してきた人たちであった。彼らが第一に考えることは、生活を確立するために、今日の仕事のこと、そして明日何をするかであり、彼らの生活は狭い行動と思考の範囲の内で回っていて、それ以外の社会的な目的はなく、世界の出来事に関心がなかった。それに対して新移住者たちは、パレスチナを約束の地に作り変えることが目標であり、そのために精神的労働者から肉体労働者になった人たちである、と。それ故、そこには必然的に意識の違いが表面化し、環境変化を生じさせた。ザルテンはそれをこう要約する。「この地にいることをお恵みとして感謝しなければならなかった最初の入植者たちが半世紀前に身を置いた環境とは、内的にも外的にも、また思想やモラル、実生活の面でも違った状況を生み出した」(59)

ハルツィユートと呼ばれるこの若い移住者は、ザルテンの紀

行では、ヨーロッパの都市出身者でその多くは高等教育を受けたインテリとして紹介される。この肉体労働、特に農業とは無縁の人間がある時自ら進んでパレスチナに来て、日雇い労働者として一年ほど様々な建設作業に従事することから活動をはじめ、その後集団農場形式のキブツの一員となり、不毛の山に腐植土を貼ったり、沼沢地にユーカーリを植える灌漑作業に従事して国土建設に汗する。これら若者たちは自分の将来や運命を考えず、考えるのはただこの国のことであり、この国が彼らに要求している仕事のことだけである、とまったく利己心を捨てた人間の姿が強調される。「ぼくはもう何も望みません。なぜなら、ぼくは自分の望みをすべて達成したからです」(93)と。そして彼らは、それなくしてはパレスチナの再建はあり得ない、「ユダヤ民族が持っている最も貴重な資本」(273)であると位置づけられる。ここでも、ヘルツルが労働の国と特徴付けた「ユダヤ人国家」のステロ版が顔を出す⁽¹⁵⁾。

そして、これら都会出身の若者たちは神の否定者と特徴付けられ、彼らは嘆きの壁で祈りを捧げて泣いているユダヤ教徒の行為を「愚行」と軽蔑して拒絶する。それだけでなく彼らは、無為にメシアの降臨を待つだけで、建国行為を神の意志の冒瀆と見なすこの正統派ユダヤ教徒をパレスチナ再建の敵と断定

し、まさしく政治的シオニストの顔を露わにする。¹⁶⁾

神の否定者と規定したこの若者たちの行動力を、ところがザルテンは、伝統的なユダヤ教と通底する新しい信仰と読み替える。「新しい人間の実践活動は、行動とエネルギーそしてリズムが一体と化した信仰以外の何物でもない。それは、決して硬直した信仰ではなく、つまり、実を結ぶことのない忠誠とは全く逆な、先祖や正統派教徒の能動的な忠誠である」(164)と。そしてその根拠を、無謀にしてきわめて粗雑にも、一言で片付ける。一見このまったく相反する人間グループは、彼らの血に同じ神秘と魔力が流れているが故に一体と化するのだ。¹⁷⁾と。

将来を担うこの若者たちは、紀行の標題にある「新しい人間」として象徴化され、こうした若者を育て上げることが「古い大地」、すなわちパレスチナ再建の真の意味であると解釈される。「本当の人間の収穫がなければ、約束の地のすべての収穫の恵みも粉微に過ぎない」(273)このようにこの書では、新しい行動力、あるいは行動原理と古い伝統との組み合わせによって、はじめてパレスチナ再建が実現する、と謳われ、本文の末尾で、それがパレスチナの大地なる未来として明示される。「古い大地にいる君たち新しい人間に祝福あれ。パレスチナの大地を耕すのは君たち若者である。君たち若者は自分を犠牲にして、そ

の胸の中に生きづいている理想を実現する」と。(276)

ザルテンの『古い大地に新しい人間』の舞台は、一九二四年当時のパレスチナである。しかしこの紀行の中では、一九〇〇年の時点から二四年後のパレスチナを、つまりユダヤ人国家の未来像を描出したヘルツルの小説『古い新しい国』に関してまったく言及がない。その一方で、ヘルツル個人については多弁で、彼を文学者としてハインリヒ・ハイネと比するほど高く評価する。また、シオニズムの観点からは、『ユダヤ人国家』の中で「ひとりの誇り高い自由な人間が、同化の夢から目覚めた」(171)と、それと同時に「ユダヤ民族の歴史にひとつの転換点をもたらした」(171)と、この書の決定的な影響力を評定する。ヘルツルは死後二〇年を経ても、パレスチナにおいて常に人々の中に、また人々と共にあって、依然として大きな影響をとどめている現実を、ザルテンは具体的に書き留めて、ヘルツルを「新しい人間」の先取り形姿と認定し¹⁸⁾、「ユダヤ民族を解放したのが、ひとりの詩人であったことは、忘却の彼方に沈むことは決していないだろう」(175)と賞賛する。

ザルテンの『古い大地に新しい人間』は、先に指摘した通り、ユダヤ人国家実現に樂觀的な展望を示すと共に、『古い新しい国』で予言的に描かれた内容を裏付け、さらにその未来像を

補強しようとする意図があつた、と判断できる。また一方で、この旅行記はユダヤ人の歴史的かつ精神的な場所を巡り、その過去を直接見聞することによって、自己のルーツの確認行為という性格も持っていた。それは、「わたしの心は震えている。わたしはこの地で二千年間絶ち切ることができなかったものすごい持続力をもつた繋がりを非常に強く感じる。今でも約束の地であるのだ！」(48)との告白に見えてくる。そしてこの直感的な過去との結合が、最初の出自の覚醒であつたあの「屈曲」を蘇らせた。「少年期に体験した小さな発展の屈曲をわたしは再び感じた。そのことをわたしは大変長く忘れてしまつていた。しかし今、突然それが再びわたしの中に現れた」(99f)ザルテンは他の仲間三人の中でとりわけ親しく交流したシュニツラーから、この紀行を大変好意的に評価した手紙を受け取つた。「明晰な悟性と情熱的な魂の人間的な心情表明であると言えます。(情熱的な悟性と明敏な魂の、といった方がいいかもしれません)この著書は文学の範囲を超えて広く反響を呼ぶに違いありません。さらに、ユダヤ人の範囲も超えて。——これはいい意味で政治的な書物です」⁽⁹⁾しかし、シュニツラーの日記にはそれとはまったく逆に、懐疑的に評価した箇所がある。「ザルテンの古い大地に新しい人間を読んだ。——大変大き

な精神的昂揚を感じ、非常にうまく書かれており、(時には)人間的な暖かさも感じるが、——どこかがおかしい、と絶えず繰り返して感じる。——それはどこから来るのだろう。決して、彼が〈虚偽〉かもしれないことを書いているからでない——そうではなく、まさに——彼が上辺の〈真実〉を書いている、と感じるせいなのだろう。つまり、彼の本質の深いところからではなく——偶然の状況から——各種個人的な体験から——さまざま主観的な、またある部分では、まさしく実利的な配慮といつたものから出てきているからなのだろう」⁽¹⁰⁾実際シュニツラーは、ザルテンが主張する類のユダヤ人としての感受性に対して非常に懐疑的で、批判的であつた。ユダヤ国民基金に宛てて書いたが、未送付のまま放置された手紙の中で、その不信感を次のように表明している。「今日ある種のシオニストたちが、ユダヤ人と自覚している人たちだけでなく、先祖が何百年も、あるいは何千年も前から他の国に定住しているユダヤ人にとつても、パレスチナが本来の故郷を意味するに違いない、と主張するとすれば、それは民族や個人の心理状況の歪曲であります。もし、自分ではユダヤ人であることを知らず、あるいは、これまでユダヤ人であるという事実によって、主観的および客観的な意味において、個人的に被害を被つたこともなく、他の国でヘブライ

語以外の言葉で育った人間が、あるとき偶然にパレスチナに着いて、ドイツやフランス、イギリスといった国ではなく、パレスチナが本来の故郷であると神秘的に感じ始める人間を事例として示してくださるなら、わたしも、ユダヤ人はパレスチナの地で、いわゆるような、生まれながらの故郷を感じるのだ、ということを感じます」⁽²⁰⁾。

注

- (1) Felix Salten - der unbekannte Bekannte, hg.v. Ernst Seibert u. Susanne Blumesberger, Wien 2006
- (2) Felix Salten, Neue Menschen auf alter Erde. Eine Palästinafahrt, Berlin-Wien-Leipzig 1925, S.100f. 以後、本書からの引用は本文中にそのページ数を記す。
- (3) Vgl. Manfred Dickel, Felix Salten als zionistischer Schriftsteller. In:Felix Salten, Schriftsteller-Journalist-Exilant, hg.v. Siegfried Marti, Werner Michael Schwarz, Wien 2006, S.172
- (4) Manfred Dickel, Felix Salten als zionistischer Schriftsteller, aa.O., S.170
- (5) Vgl. Manfred Dickel, Judentum und literarische Moderne in Österreich. Das Beispiel Felix Salten. In:Österreichische Literatur wie sie ist. Beiträge zur Literatur des habsburgischen Kulturraumes, hg.v. Joanna Jablowska u. Malgorzata Kubisiak, Łódź 1995, S.155, u. ders. Felix Salten als zionistischer Schriftsteller,aa.O., S.172
- (6) Vgl. Manfred Dickel, Felix Salten als zionistischer Schriftsteller, aa.O., S.169

- (7) Vgl. Felix Salten, Neue Menschen auf alter Erde, aa.O., S.253f.
- (8) Vgl. Felix Salten, Neue Menschen auf alter Erde, aa.O., S.222
- (9) Theodor Herzl, Briefe und Tagebücher, 5.Bd., hg. v. Alex Bein, Hermann Greife, Mosche Schaefer, Julius H. Schoeps, 1991 Berlin, Frankfurt/M., Wien, S.546f.
- (10) マルティン・ブーバー『ひとつの土地にふたつの民』（みすず書房 二〇〇六年）参照
- (11) Vgl. Felix Salten, Neue Menschen auf alter Erde, aa.O., S.131f.
- (12) Vgl. Felix Salten, Neue Menschen auf alter Erde, aa.O., S.46ff.
- (13) Vgl. Felix Salten, Neue Menschen auf alter Erde, aa.O., S.255
- (14) 拙論「政治的シオニズムの発生と展開」（Walpurgis 2010 所収）を参照
- (15) 拙論「テオドール・ヘルツル『ユダヤ人国家』の成立過程」（Walpurgis 2008 所収）を参照
- (16) Vgl. Felix Salten, Neue Menschen auf alter Erde, aa.O., S.163f.
- (17) Vgl. Felix Salten, Neue Menschen auf alter Erde, aa.O., S.165
- (18) Vgl. Felix Salten, Neue Menschen auf alter Erde, aa.O., S.166f. 267u.270 拙論「テオドール・ヘルツルのシオニズム小説『古びた新しい国』」（國學院雑誌 第一二三号 第九卷所収）を参照
- (19) 學院雑誌 第一二三号 第九卷所収
- (20) Hier zitiert nach Rembert J. Schleicher, Felix Salten als poetischer Zionist. Beobachtungen zum Reisebericht „Neue Menschen auf alter Erde“, in: Felix Salten - der unbekannte Bekannte, Hg.v. Ernst Seibert u. Susanne Blumesberger, Wien 2006, S.34
- (21) Arthur Schnitzler, Tagebuch 1923-1926, Wien 1995, S.260
- (22) Hier zitiert nach Hans-Urich Lindken, Arthur Schnitzler. Aspekte und Akzente, Frankfurt/M.-Bern-New York-Paris 1987, S.86